

市中感染症診療の考え方と進め方 第2集 IDATEN 感染症セミナー実況中継

IDATEN セミナーテキスト編集委員会 編

大野博司先生（洛和会音羽病院感染症科）は、研修医時代に筆者が指導医として実際に接した勤勉なる先生である。2年次の2002年に抗菌薬の適正使用をめざし、自ら講師になり感染症の院内勉強会を自分で計画立案した。さらには院外でも夏と冬にその勉強会を自主開催し、それが後にIDATEN 感染症セミナーとなり、現在も続いている。彼はその準備のために深夜まで資料作りに励んでいたことを間近で見ていたが、その企画力とバイタリティーには深く感銘を受けた（研修医ですよ！）。筆者はこの感染症の勉強会資料を「贈り物」として受け取っていたが、その内容はさらに発展し2006年、医学書院より『感染症入門レクチャーノート』として上梓された。

その彼の発案でIDATEN 感染症セミナーを2007年1月に飯塚病院で行いたい旨の連絡があった。二つ返事で了承し、筆者は幹事として全国80名の医師と学生さんのお世話をさせていただき、今でもIDATENの活動を陰ながら見続けている。その当時の参加者リストは今でも持っているが、現在色々な分野で活躍をされているのに気付く、この活動がもたらした効果を今さらながらに驚いている。この飯塚開催のスライドも手元にあるが、IDATENが伝えてきた教育のコンテンツのレベルは、2005年メイヨー・クリニック感染症科に留学時のモーニングレクチャーとさほど遜色がないことに気付いていた。この教育内容を活字化した前書が2009年に上梓され、筆者は当然のように購読したが、セミナーを受講できない人に対する重要なテ

キストになっているという感想を持っていた。

そして今回、6年の歳月を経てその第2集が刊行された。大野博司先生が勇退し、その事業を彼の飯塚病院の後輩でもある山本舜悟先生と、IDATENのメーリングリストで素晴らしい発言をされていた上山伸也先生が引き継いだことに時代の推移を感じ取った。

前書に比べて、本書はさらに臨床的な広さと奥行きを増した本となっていた。以前は感染症の基礎知識である微生物や抗菌薬の記載もあったが、省かれている（つまりはそれを伝える類書が十分にある）。新たに、小児の感染症、ワクチン、「風邪」、リンパ節腫脹、HIV診療、渡航医学の領域の執筆内容が加わり、時代の要請に沿った内容の変更が行われていることがわかる。それでも前書より100ページ以上増えている。

本書は臨床感染症の優れた入門書という位置付けが確定したと思う。感染症を極めようとする、4,000ページにも及ぶ膨大な“Mandell”（Saunders）のような成書をひもとく羽目になるが、300ページ程度でコンパクトにまとめられた本書は最初に読むべき本であろう。初学者にも、後期研修医にも対応できている内容であることが、筆者の目からは確認できた。

飯塚病院総合診療科診療部長
清田雅智

B5 頁364 2015年7月
定価：本体5,500円＋税
[ISBN978-4-260-02056-5] 医学書院刊